

まちの情景と建築

田中 修一

日本編

演出飾り

結界と守護

鬼瓦／鷺尾／鳥居／相輪



◀鬼瓦(大阪・天王寺 四天王寺五智光院)

かわら屋根の棟の両端に、雨仕舞いの納まりとして使われる。さまざまな形があるが、鬼の姿をしているのは魔除け、厄除けを願ってのことだ。ところでその原型は古代中東パルミラ(AD260~273と短命王国)で流行ったメドゥサの首だとの説がある。なぜ鬼なのか。鬼は悪と直結することではなく、強さの象徴として捉えればよい。源平時代に源義朝の長男で源義平(頼朝の異母兄)の活躍がある。颯爽として武辺の働きが多く、鎌倉悪源太と称された。

また一説では仏教の12天の一人である羅刹天(仏法の護法の神)を表している。鬼は神でもあるのだ。

同じような意味合いだが、鷺尾(鷺尾しび)とよばれる形もある。

宮殿や寺院の棟の両端に置き、

古代の木靴に似ているので沓型と呼ぶこともあるが、本来は魚の形を模したもの。インド

の空想上の魚で、雨を降らす神通力を持つ鯪(しやち)である。

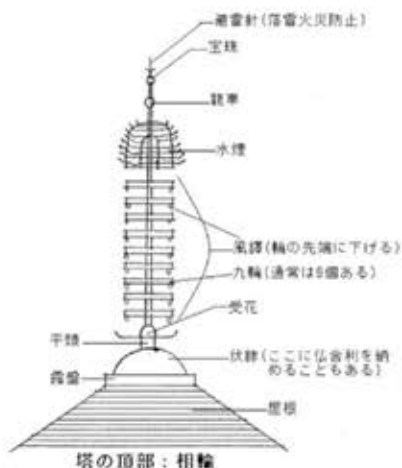
水を運ぶので火除けの呪いが含まれる。

◀湯島聖堂(ガーゴイルもいる)

▶栃木県・栗田美術館



神社の鳥居は何のためにあるのか。神の世界と俗世間との結界を示して。神域は周囲すべてを塀で囲わなくとも、この鳥居をくぐったときから、その先はすべて神の領域なのだと自覚するための設えである。右は奈良・春日大社の一の鳥居で木造だが、石の鳥居も多く見かける。但しその下を潜るときは急ぎ足で。何せ、横に走る部材の、笠木、島木、貫などは置いてあるだけなのだから、構造的には大変危ない。



◀相輪(奈良・薬師寺の三重塔)

寺院の塔はストゥーパが原型。墓に備える卒塔婆はその模型である。舍利(釈迦の遺骨)がその下に安置してあるとの目印として建っている。従って舍利の上に圧力を掛けるなど恐れ多いことで、塔の芯柱は地面の直前で宙に浮いている。しかし、これが制震構造となって、塔が地震では倒れない力学的合理性が生まれている。この芯柱が屋根の上に突き出ているのが相輪である。

これも構造の一環だ。